絵入源氏物語

巻二十　あさがほ

椙山女学園大学デジタルライブラリー

椙山女学園大学図書館

1

絵入源氏物語　二十巻

源氏廿一文九月ばかり冬の事とぞ　樓の女院又の桃園の女院なり

女院はれがくしてありぬるのひまこそ
いのなげしとめりることなくあえぬれんをりて
れとふこひちどいとこげうのことて源氏ワづ
らしことなげをばれんをもうちとけて
男は源氏いとこちなしと思ひつるものを
思て　もくでのの文ワつり給ひるとて女
桃園のなりこと
文のそこるおらすれバそちるのれとふこひまこと
つけてまうで給ひ古院のこのこちをぞ心とと
桐つぼの内
やんごとなくとひ男しのりしが今もこうく
つぎくこ男しりつのふりおちるとんでんを
樓方　女の方
ひんでこそすこ給ひ行まるくあれまるる

心ちして、家にけうとひとのやうなり。清水やあい先ん
しまして、れ物語ゆゑ、なほいとあるめさうなれけうとひ
こころぶさぐちなるおこのくさりもしもされど、
なほ[たかい]なほ[三文]なほ[養上の母]なほ[文字]やはあるまはしくあらぐされ
ぬ程なるとまてこそれこゑ、ものいふこちらく
さくなほしめくるもうるさなり。院[女文]の[相登一帝]へられ
ぬて後ぞうべ心ぼそくさてしなりいるこうしの
のはまるいとなるぐちなるすぐ作りを。
この[指]やえくうちすてのへれど、いよくまう
なれくよとまり作りをぐくこちりとをを作る
ちん。れ[ほん]ものれしめべく作りとをを作りて

うくもありめへるうるとをへぐ行うこまりて。院[ほん]
れのて後いこ面ぐまつけてなるで世のやう
まも作ぐず。なほしめけ[ぐ]ぐうまあうり作りて。ちくあ
うまなどひ作りしをこ面くなはやけまうど
まくれまりていまるううぐりいとまるくるど
して。寺びもまりていうくへのれ物語をぐまをを
うけこ面くをめをいぶきくなるひめへいうつちん
なぐををて作をいとをくあまくいづるこ
つけてもぐめるをを世をなるぐこ面まてこめへ
ぐす。今なぐれうめいをとなほく作れど。
くてうまうちへうめへるれうちぐひまるん

わりしころをこはりさしてまうしくば、くち
おしくおもしと思ぼし侍りとうちわろうさゝめそ
いとこまかにわびまくりつまひにさまかゝれ。
わらしに物しのへりしをこはりそめしとさ、世る
うかひかりのいそかしうらく、おどろかれ侍
し給ふとさぐこまかにかすずに、ゆくしく思て侍りそ
るん内のうへるんいとうくに咎しをのへるとく、を
こゝもかをとかりともおどりのへんとこそれなし
ちかり侍れとおぼしくとらへしの人ぐらゝまく
こしむかひて、人のほめぬわざられとたりしく
やぼとも山ぐりさぬそ、いそうをひとりをとれ侍りし

年比のうちなるすゝおとろへまて侍り物をせうちの
れうちらハいかしへのうちもなにしぶ人なくやとこ
そ、おりごくこゑまり侍れ、おやしきこれなるしを
かりまるんとこそてし給ふ、もの紀ぐこゝまつかいていく
むさ今やのび侍らん、ふにかいまもわびそれ、さる世の
かげさされさあめる心ちらんとても文字の給ふ
らやうしくさうべきされゆかりそひておもてしく
こゝてまかりのをとうしやと侍る、此うきめひぬるも
さやうなとくひ給ふかりしくありしと甲しし給
ませすうしこととまかり給ふざともきこゆるひとれなるまし
まいまにかのふき夜に侍しもまし、それさしもる

うきゆてとくうしめしげる乳色ごとに実に注あるさま
はまへをうやまはれがれぐちる前栽のうちろ
ぐへもこるこのりされてのどやうちすがめのふ
らんはありさ面うちもいとゆるしく表ゆてえ
わんでこ面もでくうひうつめでとるて
ゆんいろろぐちるやうちるをあるのは
うひうさめべりりうてやすてすれこうと
つり絵ゆうりうる程ちれどまび色のうする
ろうさ三丁のすきげ表ゆどひ風ち面めしく
味とをしげうひあるまはしすれこいうくうるる
れがうまのひうるいれまるちんぐ面い

（注）

んしてはをうそうこうこうのはいまうしうりうるく
ちうさ四ちすううすれまへれがうさびうりけう年
月のらううぐへられはゆりいまはうちとゆる
さき絵ちんとぐうれこはけうとてあるずはばし
うりあうりしせいこれ夢ゆこうるていまるんさ
めてちうるさうやとひひへうぐめぐうくはゆり
らうちどいこびけうやうぐめこうこうすぐうはうん
とこうこういぐしのへりはけうこうこうぐめぐうこうさ世を
れとこうるうさことうつけてもはばしつけう
へうれど林のゆうしをはうしまるこうしつれ
るさうは紙すぐすれ今いるのいうあるようううを

活ゐんとすんなるべてらるつづくこしこと之伯
ゐ一後之面ぐるこひのへあいあ一れいうぐ
くさこしぐるとあれぐらる罪活所地いな
どもぐこしうも今すこ面めこけえ
そひのひるけるとこいというあ一のへどが
くこねのほどるはあこぐあと
ちぐて世れ表ぐうりさうあくるちひし
こと弥やいきんとあれぐあれ心うそれうれ
けこいこれしなどの風こぐてこと活あひ
ぐやうもここれしぐそぐを弥いいぐ切りけん
ちぐぐうるるこことここあるも罪やくるいと

るここいくこぐあれ罪あるとこ面ハこ一月よ
きへても地ちくのこひこいりあて之ここここ面
くあるこ罪ノ女ごりありあやめりすこぐしこやうるあるり
めるをちぐあさこちるこぐうちちるげここそこち活つ
ほうこひのけりるはおもるくこそちるつぐ如れ
こここめやつれをけまぐとぐるここここすべく
やも也てちるのひけるとて出活ちぐり有也きこまで
例のこここて罪ノ女ごりザノあへりおはるくのもちりこ面ぐる
本の集の書ちるひこつけても也ずぐこここあれく表とり
くへこつそのありくありここも表よも也ありく
こ活これ心ぐへちどもこひ出罪れここす心ほう

ちてこちらはなるいまてねざめがちなるに
しるどくこころしきものて新書をちらばかれ
うゑどもの中に あるがのうれうれなるひま
けれて あるうるさくさてなへもこるえ
ねるどおしをめて なれ給げかやるうしれて
ゐるに へうるさうちしはりてうるうでもい
とぐるがうるげんとねるくされど
うりの爲ひとれぬあるがのちれの
きりいさやるんうごろのはりを表と
ぐりいさるとともはしるるんやるんろ
ゐるるるるるの入る

槿をとりびとへおいてこのころぐへるおばの
のるこんもこそめやうやとばしーへぐ
もれすぐとりまちるひてこそかれば

秋槿

秋そそく方のまぐさるむとばれあるち
ちさうるうつわさぐかまりこそれらそへさ
つけてもゑけくとのこあるいるのおりしさ
うまるこそいるるようさぐくゆんぞ
うあをとびのこのるびるるすみげこは
をおりくこめり人の出行ぐさ海ぐる
てろれつそのりいけこることもつぐ
しまるびるすはばゆぐむとあれば

そそこらるこまぐこりしのえつるる
ともおりりりこちへりいまこるよまくく
ちこれみぐこるどもすげるこくおをぐ
るをくぶりまそこるれぬ色ちぐこちち
おりそをめるをひつえやむまぐくえこる
ればこぐりてまやる実絵ひへぐしの
のるもれおそして撲をむへけるる
ちひ絵さあ海へぐれこしもあこまし乃
ここぐこるびこやすあるるどいおやまちもころ
べくのでここれれぐこやのそのこぐるこるく
おばしこれこしを今いまそそこれもこひ

あるべきされば、まいて思しまで、ちかうなき事につけ
かれかへりなどのおりすぐさぬもかひなし、
やうやうあさましんなど、人のあはれいひをさくり給
つゞらとけぬべきされ気色もなけれど、ありがたく
かはゆき御なかの心ざし、人を、(源ノ)よそ人よりそり、めづら
しくもねたくもおもひまし給。世中にもりきこえて、
前斎院(ぜんさいゐん)にねんごろに(源ノ)きこえ給へばなん。女五宮なども
よろしくおぼしたなり。にげなからぬ御あはひか
らんなどいひけるを、たいの(紫ノ)うへもれきゝ給
ひて、おぼしけるは、さりともさやうならんこともあらば、
(源ノ)へだてゝはおぼしたらじとおぼしけれども、
つけにめとゞめ見給に、(源ノ)御気色などもれいならず
あくがれたるも心うく、まめまめしくおぼしなるら
んことを、つれなくたはぶれにいひなし給けむ
よと、(紫も槿も宮ノ子なる也)おなじすぢにはものし給へど、(槿ハ)おぼえことに昔
よりやむごとなく聞え給に、御心などうつりなば、
はしたなくもあべいかなと、(紫ゟ源ノ)年ごろの御もてなし
などは、たちならぶかたなく、さすがにならひて、人に
おしけたれんことなど、人しれずおぼしなげかる。
かきたえなごりなきさまには(源ノ)もてなし給はずとも、
いとものはかなきさまにて見なれ給へるとしごろの
むつび、あなづらはしきかたにこそはあらめなど。

さぬぐはせひとくれ給ふところしまさくところそ
うち思ひあざやかにすぐれてめでたきやうなる
つくりおぼさば色はも出し給ひがたしちやう
あながちにうちすゝむるげなりやくとは文を
かきてへげはへのこともなしうかりぬさか
あり顔色をさへはすめのうしとうとましく
のたまひ冬寒うんけざむくともさかりて
さしぐしみさまうれしとおぼしあまりて文を
案は例のちかき寄り給ひ雪うちてまてえんあり
さそうればおまへしも御ありけるねかたどもは
つよくさきちめ給ひてこゝろしるけるもしくし

のくればびはうこゝろのをかしうなん人へくれども見え
さうしさすがにまかりとてこゝにして給ふ女君
宮のうちやもあらしのふあるなとともひとつて
あんとていつねごまつればころもやをま給ひぬとてひ
君とをてあそびあそぶしうしめしみすなぞあれさ
あはれなとおやしくはらしこゝれにあはれ
つゝむまゝしやおのやさまる衣のあまりめあはれにて
なくおぼすまゝやとてとてんなくきまめいく
あどきましておまへはあはれゆくしてげうさむとおぼ
かりそれとかりまてうちきむさせてかすへるへ
こゝすて出給ふちあうあれどやうはれまさしそこ

ころしおきてげれば世のひとの、くちをしきことゝもきこえけり
せちどうしあるてすぐしけるを、えひつぎてやう
えり。むすびなりけるぞとも、あれど、ころおひのさかり
このましくおもひて、宮のひかりをいつくしく
えんあるものすがたをつくして、ましとくらいりしれは
きり給ひしかど、またびあくすおぼされ、れいどんなく
そのびやかなるうちかりして、うちからりはかれあり
そは地うち給はあるなりや、おほそのこゝろやさ心
ばそさき殿まで、地しけ給も、式々のみやよ、年比は
ゆづりそえて行かれと、今はそのむすめをしの給も
よくありまてとかしかれだなど、くべきものの人

あるをじ、いでやれすさき心のかりがうえぞ、おもうしれ
まづあるあめが、りうくもろさことも妙きあんなりつぶ
やさあへり。家ははふかめしておのひとそげさうくある
れかどはりし殿もんもかろくしかれども、まし
あるかうとしくしむ紙、人かれさとあひて、家のお
かうまれをもうそこあれど、女心かしもいてり給も
じゃおぼしけるをおどろきて、あけさき給、このど
あらさむげあるけるを、ひう浮ずることぞそでとゞまる
えあけやしまず。それらりはかれおのこちをあさきある
べしこゝにひとつとひきて、おほやうのいとつらくさびよ
されば、おうくずとうれかうをおもちれとたえしめすも日

（源氏ナリ物語を云ふ）

まことはすれども、こゝろせのあるるまゝ、ぬしの世の礼、こゝろをつくしてやどりをえあるひ、とてぞ、本なのいろまこゝろをつくしてまこゝろ、こゝろずえひよ

いのまゝにまゝはぐくみすぼれ者か

墨とあれしこゝろれぞ、やひこゝろひこゝろひ

あひてこゝろ

[illegible]やのれうれいのれまれぐうしこそて治す。
かうことぐまれそこそこくちうちうぐめこそて
けうてのへぐ[illegible]てもおぐうぐねうこさう。
[illegible]もあうびうちーまて[illegible]ひまぐひまて仕れば
地もえ男しやうぐとのふぼぐまうく[illegible]びこと
うこうこうめをくすれば[illegible]ろしびうぐうちぐ出う面
ちんうすうるまういうかうめーうこうこうぐう
うちして[illegible]うう人あり[illegible]こうれぐこうこて
めーうんうこうれうこうこうすうぐこうるあうまれ
うこしうずまへうこう絵うあうるちん院のうへいたぐ
ぐうぐうちうこうを治ーうるぐうるけうけうて。

[illegible]ぐーけう[illegible]侍のうけういひーひうといあうる
うりてこのうやのれでーまて[illegible]こうるふうこうこ
うぐ[illegible]面まてあうんたうぐ[illegible]うち絵いぐうけう仕。
あうまーううりめその世のうとへうれけうーぐうる
うりけうをうこうこうひけうもううぼそうこう。
うれーうれーう急れけやうーうまううぐべと
うぐうこうへうこうて[illegible]うりねへうれけうこひう
つうぐ[illegible]うひけうーふうぐうぐうる面めうーうこさ
まーうこうてううて[illegible]うこうけうこううううちけうこう。
うひやうーうこうこうぐうひのうすぐうまうつうこうて。
うちぐれんとうれけうへうーひへうーはぐうなど

内侍ノ
思しめさばゆるさせ給へ今までもながらへがたきのやうに
うばひそまれ給ふもののひとつへこれも哀あり
これさりとりいはじとし哀れ更衣おやかいひろ
まうさく女のひめはちひすくてなかなかに
まさしくへなみつもあべきありべき位の女とこころの内よ
きみよおさなしとのにおぼえらぬほどに年の頃ぞ
男女のさりすくなげさるに心ざしへだてども抱きかかすく
ましくへのいつさとまりてのどやかなる時もひとも
うちしてさぐしけるいちきをすべてきぐゆめあらさ色
ありとおぼしまして抱かれたる御気色もなかるる
内侍ノ
めでたさにてはうやく

内侍
さればこれ跡こそつましくれねおやの御
とかひしひとくしらさしかれいつとましくて
源
男まゝへて後も待ちまこの世までおやとまもるも
おしあしおりやとふそれもしき跡ぞや今のど
またまゝしますべきとてこのあめおしわたしまれ
見かうし気りられどひとつひきてしぐれあかぬも
いかとてひと夜かたる夜はおかむき涙はさし出て
うすしくまいはれかな音の声まあひてちかくいと
源仁
おもしるかさしれさ後ありおりけるおいつくのこ
かげさうも桃李子まいりよのかめもれにさとひとつくるし
とおぼしいでくれておりしくちんにさよひかはとまめ

やくそくしてのち、ひとくにまうでるとも、へづて
ゐるべきの給ひをんとぞ、ひとゐうゐまうしまるをんと、
ありとうてきめうそくのへど、むりに（程ム）我も人もワ
やうまつゐゆるされうしせうぞる。古家（祇園）るどの
心ゐきあばしうりをれあうまじくもづと
ちひ男てやとすをまれをゐよさぐすぐづき
ちるうほどうてひとくゐもいとまばゆうんとお
ばして、うゐるうぐさちるられ心ちるればおぼ（ほム）きまう
つしとちひうゐうゐ給さすぐるとうゐるくさし
くちるちてちるといあるめ、へづてのれううなどぞ
心やまうしゐ夜もいうゐうけり。ほのけうへ
もぐうして、まうとまいと心ばそく見ゆれば、風
うゐ間ぐるとうのぐひまて
づれちる夜ちるこうりめうゐうそへのつうさ
そへてつうれうゐうばうとのゐひまうゐを、
ばるくうゐいうとへぐれいのさも
（樓）あうあてちるはえんひとれうへうく
るとうゐうゐうぐうりを、むりまうゐうとは
ちるうのぐとうゐうてゐうりうひちるていぐまめ
やうちうゐ男いぐ給もいとつうくうゐうゐうち
しのへぐいとくうれうゐまうりめぐきあり
夜もうゐ給ちまゆめくいうゐばるぐまうれ

なれどやとてをちこちうちさめさうこひこまへど
なほごとふりあらんへどもあれくるべけれあれ
どちこちうけをられてもまてあるしさうし給へし
ちうしをしらてなどいこと給ふれれ給ふを
心ぐるしうとりあげ給へのほどのはしこうもを衰
まはばしたあまはあるほどはひとうこ海ま
こ生うとて　をしちうべてのれ人のめでまゆん
てこやちひちれむ　何いうぐしこうろの
ほどもこうり給めべくこづてげちあろ申こ海
をとはばをばうてうんなうけもいとくあひ
なほどそのれりへりちるどいうちうこで　はばけるか

ろまうしこうれうこうし給へづてのれいへこうこ
なうこでなうてん年比こげこけるけこうしちるあ
ぐりれをこちひをといはばしこそどこちうう
ろはこをもまてもうればほあんも
中こうまあうこうこうこうて　へのこう
ちこでやうこれへのこちこぐちこ代はばしこり
うこうこうこうふへよりけ給こずいこうれ
心づひしはひてやうくれをこちひをのこし
給れ様ノ比こうこのこんこちあうこ　あれしうへこ
ひこれれこうこちのばうこうこうこうこ　挑灯ノ
いくこうこうこはゆくまこうこはこうこうこうこ

わんごろされ心とけうーまし人びとこれひとろろと
ようきこさあるもひとろろとろろ也おなぐもあれ
ごちるばーいろろうもあるどづれるきれ
気色のうれさよまけてやこちんもちかーく
げろろ人のれあり為らればーしとりあ
まーくまれをうーばーこう世の人のあ
うろけぢめもろーあつめて苦ろ也もあろ人
まりてばきれば今さーのれあぶけを向て
世のまどさをよばーちぐーむちーろんさい
よいよ人ワ人ちるべーいるをんとれろろ
うぐさて二童院よ来れろの話を多い角も

れまうーのこばを志のびうまへどいうぐうち
ぐうーありもちろんやあやきくれいなるぬれ
気色こそ心えぐろれてれぐーをきやるけく
いとかーとばーしうこ為も為るうまはーきれ
あそひちり家うをみて後人のいとうぐー
げるのこ世代ばーしうもうろぐうーうこ者ろ
ばーきおとぐも地ーあけで為づう人なきこと
きげうちん。この月どれこえ為ちぐ代為ちるうあ
うこるばすんもごとちりコ表るれど今いうり
こを心のごうるばをおとちるびのひうれだまぐ
いとさひやるもちるー人の心ちこうあこ為よまれ

一 法こそうしこれちぐまろれうは四ひさい
ぐこひさつくろひのへどいよく（業）をもこそまれも
きそこ法ひぐいとくわびのへかくらぐちう
ちこそこそろぞそでつるちさうこうくまで心
とうこもいりぐさるれわざやくけいおるぐ光
絵（猫 源氏）物語はもるるしぐこそあるやもをしひが
むろうあるそれいくまてもるれうこそでよ。
をのぐくこのひてん学ちうこよるうけぐをされ
心ぐへるうをさうぐくさりく。ぬぐちうぐ
学ちやまるうこもつれぐよまくを法不
るれぐこ西このれいくへるぐくうへどまく
ちこさ西よるあくめをくちんあうこうまうれへ
ここ西べこさくこうやいうこちうこういあくぐこを
ひるちこくまへるで日ひこひ（業と）ちぐこあ学
法書（地）のいこうりひまりこうへよいまもちを
て松と竹これけぐのりくうこ西かタぐれよ。
人のれうこちも光まこりてこ西けぐよつけて。
人のこうちをこうつをのう前まみぢのこりまうも。
冬の裏のすのう月ふ書のひりあひこうやこそ。
あやこう色ちさ地のかよこそて。ひ世れはうれ
こくまでぐひるぐこれけまくるさも表さも御くも
りうれ。ぐこ西ぐここあくりいひをこけん。

人の心あさましくて、さすがにあげを結ばいく
まるべきにもあらで、ひろもとにえつかされぬる。
とのれうの前栽のげうろうづくりやうやう水もい
とゆうびとびて、池の水もえもいはずをかしき
るつくべきにて、春はうぐいすなきて世話
なりげるすがらうつくしきなどはなはだ
てはなやかなりなれどかがやかぬのあ
きぐれさあびしげなるさまなどぞ
めづらしこそあるべきあれかつはのもあ
ろさをとはまてもやしあるいと
けざやかるちいさきはつくもげてよろこび
ちあるり。あつまるどもおかしてうちとけ
がおりげるりぬるまろがさむとゆく
つけれどえもなりこごろさでつがりぐ
い東のひまもるどり出おてこころまもちげる
てふ

一とせ中宮のかまへよりさの山にてうしろ
ろまゆりうつくしくるれど我もてしまくるる
こと紙をもてしまりしれるのありくるつけ
てもいかりうあるずもあるれいとけどをく
もてるまのそこそこされあり海をこるて
ありしこといるりしうどれまどらひのほどま
うこそやすき地まは之しうこうこうこれ
こ学てこあるこうこうありるつけてるるごとも
こうこうこうひしまるいでこうこうこうこうこも
こ路いざりしうどいうこひありてちうこ海す
こうるこうこうこうこうこうこうこうこ

さぐりのあぐひありなんや。をとこ。をとこ。をびれこ
地こ。おこ。こ。づさこ。こ。こ。のおこ。びたこく
まれ。一ぢ。しを。こ。みこ。そ。いさ。へど。ぞこ。こ。さこ。を
ゆへこ。こ。ぞ。まれ。し。ぢめれど。こ。こ。こ。ぢ。
こ。さけこ。ひて。ぐ。ぐ。こ。れす。こ。こ。へ。ぞ。
こ。こ。こん。茶碗の。れこ。ろぐへこ。まこ。を。
まぐこ。ぢ。こ。ぐ。こ。こ。ぞ。ぢ。こ。と。を。こ。と。
こ。こ。あこ。を。試こ。ろづひこ。こ。べされあこ。
こ。れひこ。こ。ろやこ。ぢ。ぬへこんこの。ぢ。
侍のこ。こ。いこ。こ。こ。ゆへこ。こ。こ。
こ。へこ。こ。ぬれ。あこ。こ。ぢ。すぢなぐ。

まこ。れ。ぢ。ぢ。ぢ。へのれこ。ろを。あやこ。こ。
を。ぢ。こ。れこ。の。へぐ。こ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。
こ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。
こ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。
ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。
ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。
ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。
ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。
ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。
ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。

こひあがれ子を母をよこけらて作るれいつひ
ゐれこそこの人いまだらぶ人いずれこういうこさ
世ゐりや東の院よりすぐすこの人のこころぐ人こそふり
ぐくらうこれざこそこそこそあるめもれを
ちろこつけての心だを人よりもくこそめ
しこりゐるぐやうよ紙つもしげよゐひて
すぐあるこいまこそこそこそこそしくべくもあるぐ
ちう表こそひ作るゐぐ学今のれ拙ぐこりよ表
ゐけゆく用ゐるくきこそ。こげこよ面白しゐ女
氷こぐいまれゐのりゐやこそをむ用の
げぐゐるぐこと紙こいぐしてこそうこうこさ

ゐこるぐこるゐ拙ゐこうけこげゐるこんざした
ゐやうのこひここゐこの人の切ゐげこふこ切して
こぐゐれいぐここうけこれここゐもこゐこうこ
けべしぐこのこゐここゐこ

ここつめて学こひここ書ゐこう表ここゐ
をしのこうれこいりゐひても文のれここをこひ
こて切用とれごゐれこよ学ともゐくゐのこよこを
ゐをいこぐくこここゐ人れ乗色こて用こぐこと
の話しこぐこここのこれゐこれこれぐ
しこうこここここここここけてもこくゐんと
の話れいこここゐとゐぐこここここゐ

して、女房のこゝろざしいとの給ふ。おぼろけにて
いらじとくちおしくむねのさはがしくなるゝけれど
さるへて、涙もながれ出るなり。今もいとくちをし
き人給ふ、女房いかならんとおぼすほどにうちも
じらでかくのみなり

とけてねぬ寝覚さびしき冬の夜にむすぼ
ほれける霜のうはじらさ中にあはざりけりとしと
おぼしまどふくおきみてさしいるゝ硯にれず程
なくさせ給、あつかりしさまを給ひしこのくるも
さぞおぼさるらんとおぼゆひを忍びよろげに
つくりかけるうれしけれありさまなるにこのひとつ

そひて、おれいうじや大納言殿よ守給らんとも紙
さへそひ侍れかめでたさまでもこの人のすぢらし、
なまめかしくさまくせふかずへらけんとこゝ色姫
ぞこれいとおぼされけるうれしさ夜まで、うらげもやをく
どもかひあるべきさまもあしよばぢちなきさみていふ
をそくいふづくまうなぬふあしきわざすべからんと、
志のびてさるべきとものおそ大家とのゝ根こそて
給、家はいとくおもしよおぼしき中にもおそさて夕
ほとうしさはをぐれ給ふやあんくなる心乃あり
けりもうらしうおぼさるるよ、ながさけなくこうよ
なきことのやうなるをしの給へ家をなどかさしも

まべさ（ばか）まこころいろうせひつさ結ことちろて（言あと）くく
までうづんとも（ばか）ばしこぶざりしを（ワ）ワ（ワ）ぬく
まてあすこそ見えれどこそ（まこ）家のれこくなを
ばしうけこれどうこづしてこ人のさくを
あしばば（ばた）ろかまろべさ人やいろちある
義ろうちじめてひうこさ人あるべさくはこれ
ろうとうびるこしむこそこまくこそせへどワ心
ざーのまこれどやあれしどうこうしうせひ罪
法（ほう）心のうちをこをりこうばまている恨罪
法（ほう）んぐくさはぐろんとちこでらどれ（た）こそ糸
ぬり一枚も人めこげこてせみとをもえ罪九ぐ

畑のころをうくばしこどろいうこぐくるを
ればるワざをこてころ人ろさせいろはは
すんをうひ罪ままでいうもうろ
こそじやろどうぐとばをれるあう
ろうこそるワざをまし法（ほう）んい人やこ見
ここひべーう（冷）ちるれころのをるばを有や
あんとこをつむはどよあぶはけを四り
みてわんでまり法（ほう）おろどちすまここへは
ろこ（保）人をこふころるまこてもうげこ
ぬろれ（せ）法（せ）まやまどんとばをどうけうや

26